

編 集 後 記

すぐれた性能をもった食道ファイバースコープあるいは“Panview”ファイバースコープがあいついで出現しているこの頃である。

食道病変に対する消化器病医の関心は高まらざるをえない。もう食道病変の診断と治療を特殊な専門家にだけまかしておいたのでは、早期食道癌の診断も治療もタイミングを失ないかねない時代にきているように思う。食道ファイバースコープの普及度も御本家の日本で外国の1/3ぐらいだと聞いている。

こういう時点において、特集「食道炎と食道静脈瘤」が企画されたことはたいへん意義が深い。

主題を御執筆いただいた諸先生はいずれも多年これらの主題に取り組んで数々の業績をあげておられる方ばかりで、欧米の Dagradi, Whipple, Walker 級で、しかもより若々しい頭脳をもっている。いずれの論文も他人の業績の紹介に終らないで、簡単にくつがえせないだけの独創性がある。

座談会もたいへん面白く読んだ。司会者が自分自身苦労して、諸問題を熟知しているからである。なにも知らないと、こんなに興味深い座談会は決してできあがらない。

この特集号は食道炎と食道静脈瘤の日本のレベルを示したものであるが、この領域の研究をさらに力強く押しすすめるのは、消化器病医全体のエネルギーであって、今後食道病変に関心をもつ人が多ければ多いほど前進力は大きくなるであろう。

<竹 本 忠 良>

<編集> 早 期 胃 癌 研 究 会